



河野 勝



社会のひずみ

風俗の常としてと遠慮するか、人並みにと皮肉るかは別として、金儲けと色ごとの噂話には大いに興味をもっているが、元教員のはしくれのせいかわ、現時の世相、なかでも少年非行の問題にも少なからぬ関心がある。新聞やテレビニュースで少年の傷害事件や学校内暴力の事などを見聞きするたびに、この傲慢な現代文明、支離滅裂の人間社会への天の叱責と見て、心の奥底に、一点、痛快の念のあることも否定できないが、やはり、妙な世の中になったもんだ、何とかならないかと何時も考えてはいる。ただ浅学の悲しき、いくら考えたところで、別に名案がある訳ではない。

何かセンセーショナルな事件がある度に、世の識者からいろいろの分析と処方箋が出されるが、それが百千と尽きないところにこの問題の根の深さがあり、たいいての学者・先生も結局は「社会のひずみの反映」と尻尾をまいて逃げ込むのがオチのようである。

「社会のひずみの反映」と言うのは百点の解答であると同時に答点でもある。どんな些末な事件でも社会の反映でないものは一つもない点からすれば、この解答は絶対の真理であるが、その事件だけが社会の反映であるのではないの思い至れば、この分析はナンセンスである。処方箋にしたところで、社会の反映であれば、社会を根底からひっくり返す覚悟がなければ解決策としての意味はない。

某事件に対して某評論家の言った心は「非行の罪は社会にあるから非行者本人を温かく遇せよ」と言うことらしかったが、逆手をとれば、現下の社会のひずみの一つは子供を甘やかし過ぎる点にあるのではないか。

社会はひずみだらけであり、そもそもひずみのあるのが社会の本質であると割り切れれば、ひずみを無くしてし

まえば社会そのものが存在しないことになる始末であって、ひずみの根絶など出来ない相談と言わばきものである。そのひずみの発現が流行のように、時に戦争となり、革命となり、凡百の頹廢となるのであって、今日の犯罪、非行も流行の退潮のようにやがて是正されると達観すれば、別に憂慮するにも当たらないだろうが、ただ万人が何もしないでは流行も退潮もない訳であるから、各人それぞれが社会のひずみと思うものに挑戦して行く外はない。

言論の自由と言うことで、自分のことは棚に上げて無責任に他をあげつらう風潮が感ぜられるが、これも今日の世間のひずみの一つであろうから、こは一つ、他に呼びかけるなどと言うことは一切止めにして、自分独りで出来る範囲内のことをこっそりやってみることにしなければなるまい。

今日の世相の最大の欠陥は口先だけのキレイゴトが多すぎる点である。口先だけであるから中味のあることを取り扱っては荷が重い。尻をひいたようなことを麗々しく美談に仕立ててチャチャしていれば、後で責任を負う心配がない。論語に言う「巧言令色、すくなくかな仁」である。

世の中に本当に「お目出度う」と言えることがそうザラにある筈がない。後悔に後悔を積み重ねて六十年を生きて来た私に「誕生日お目出度う」もあるまい。娘たちには親仁の気持が察せられているからかねては緊急必要のとき以外は電話もかけて寄こさない。だから「父の日お目出度う」とチマチマしたプレゼントもされてもおかしな気になるのである。だから、ネクタイ一本ぐらいにこだわるつもりはないが、これが社会のひずみを矯す、私だけのささやかな胸の内である。

日陰る部分選み歩める

桃原 邑子



私は左の足をひきずって歩く。左足の膝関節が曲らないのです。だから坐るときも左の足を伸ばして坐る。その膝が曲らないということが、まず走れない、走れば充分間にある汽車でも間にあわない。結局、それだけ時間の浪費ということになる。誰かと旅行するときでも時間を生かしてまわることができない。階段の上り下りは一段一段と止まらなければならぬから他のひとの二倍の時間がかかる。そしてのぼるときは、悪くない方の足を先にかかず、下りは悪い左足を先にかわさなければならぬ。うっかりかわしちがえたら転んで大怪我をするということになる。世のなかのいろんなものは健康な人のために設計されているから文句を言うつもりはないけれども、バスに乗るとき、入口の段が高すぎて、ひきずる足を伴わずに大変である。また乗って椅子の前方がふさがれた構造では足が伸ばされぬ。タクシーに乗っても前の方がふさがれたのに乗りあわせたときはどうしようもなくするのである。二三日前、歌の友達の結婚式によばれた。畳の間であった。結婚式に足を伸ばして坐ること自体が失礼であろうが、それは許してもらうことにして、片足伸ばして片足をひきまわすと身体が不均衡になるせいかわ、とても辛いのである。そんな椅子に腰かけるのは、どうかとなると、椅子に背をつけてふかふかと坐ると曲らない足が宙に浮くからむしろ畳よりも辛いのである。たった一つの膝が曲らないために通常の生活が何と不自由なことか。それでも、これは私自身のことなのだから、そのために他の人に不快な思いをさせまいと、ひとの何倍もの気をつかわなければならぬ。だから、私は、いつもさわやかな笑顔を忘れまいとする。もしも私が明るい性格のように見えるのなら、それは、この不自由な足が作りあげたものであろう。こんな足でも、ないよりはどんなにましか。たとい曲らない

でもこれは、私のほんとうの足なのだ。私には、二本の足がある。

私は、二十一歳になったばかりであった。膝は複雑骨折であった。内出血のためにうすのうすに腫れあがっていた。高熱にあえぎながら私はその紫の足の痛みに泣き喚いていた。医者は、壊疽というのにならぬ助かないから、腿から切断した方がよいのかも知れぬと言った。私は、死んでもいいから切らないと言って大反対をした。それで様子を見ようということになって、足はしつこいのギブスのなかにぬりかためられた。骨折の骨が固まってくれたらと言うのであったらう。

足がないくらいなら私は死のうと考えた。いろいろと死ぬ方法はないものかと考えたあげく、痛くなくても痛い痛いと叫んで睡眠薬をもらった。そして、それをベッドの布団の下にためて、それが二十ぐらいいったとき一度に飲んでやろうということになったのである。そして自分が世話になった阪口先生に手紙を書いた。手紙を見た先生は大変に驚かれ、世の中には手や足のない人はいくらでもいる、その人たちは、その不自由に耐えて懸命に生きているのだ。何だ足が一本ぐらいいいからと言って死ぬなんて。そんな弱虫に教えた覚えはない。などの励ましと返事が、ちょうど死ぬ計画の日に届いたのであった。そんなで私は死ぬのを思いとどまった。その日の回診のときに、私は布団の下から睡眠薬をとり出して並べ、医者に聞いてみた。「この睡眠薬、全部を一度に飲んだら死ぬでしょうか。」と、すると医者は、からからと笑って答えた。「これは、睡眠薬ではありませんよ、睡眠薬を与えてばかりいると身体に悪いですからね。痛いと言ったら、気休めに栄養剤をあげたのです。」何々。そして奇蹟的に、私の足は切らずにすんだのであった。こまぎれの骨をギブスが固めてくれたのであった。——わが悪き足の記憶はわが歴史日陰る部分選み歩める——